

研究ノート

ヒロシマ原爆被害者の人生を支えたもの (1)

——被爆者と非体験者の KJ 法による比較——

森田 裕司*・一丸藤太郎**・大澤多美子***

倉永 恭子****・財満 義輝*****

中嶋みどり*****

1. 問題と目的

1945年8月6日、広島市に原爆が投下され、多くの人命が失われた。原爆による惨状を目の当たりにし、自らも被爆し現在まで生き延びた人たちは、これまでの人生をどのように生き、そしてさまざまな困難をどのように乗り越えてきたのだろうか。

原爆投下後六十余年の長い歳月が流れているが、これまでに被爆者の心理的側面やその人生に焦点を当てた包括的な実証研究は非常に少ないのが現状である。

そのような中、広島市は2008年度から被爆者への大規模な調査研究を実施し、われわれの所属する広島県臨床心理士会が個別面談調査を担当するという貴重な機会を得た。そこでわれわれは、広島市の調査担当部の承諾を得て、対象者一人ひとりに「人生を支えたものは何であったか」を尋ねることができた。そして、被爆者の心の実態やその人生の一端に触れることとなったのである。

そこで本研究では、ヒロシマ原爆被害者の六十余年の人生において、何が支えであったかを

明らかにすることを目的とした。まず研究 (1) では、聞き取りによって得られた被爆者の語った言葉を KJ 法に基づいて分類し、非体験者との比較・検討を行った。

2. 方法

広島市は、2008年度から2年間、原爆被爆実態調査研究(第二次)を実施し、原爆体験が現在の心身の健康に及ぼす影響を検討した。その際、広島県臨床心理士会会員87名が個別面談調査を担当した。その中で、市の調査項目とは別に、対象者の人生を支えたものは何かについて、聞き取りを行った。

<調査対象者>

被爆者：広島市内に1945年8月の原爆投下以前から2008年6月調査当時まで居住し、被爆者手帳を取得している71才～84才の者、396名。

非体験者：1950年～1952年の間に転入し、2008年6月の調査当時まで広島市内に居住している者。かつ1945年8月5日以前に生まれた71才～82才の者、116名。

<調査手続き>

面談調査の最後に、個別に「モットー」「座右の銘」「大切にしてきたこと」を尋ね、聞き取りを行った。

<分析方法>

①研究者6名の合議のもとに、対象者が語った回答内容のうち、人生を支えたと考えられる

* 広島経済大学経済学部教授
** 広島国際大学大学院心理科学研究科教授
*** 広島市こども療育センター発達支援部長
**** メイヘン心理相談室室長
***** 広島修道大学人間環境学部教授
***** 広島国際大学心理科学部助教

言葉をできるだけそのまま抽出し、キーワードとした。その際、被爆後の人生を支えたものを検討するのが本研究の目的であるため、ごく最近の生活のモットーなどは対象から除外した。

②得られたキーワード、被爆者535個（平均1.35）、非体験者120個（平均1.03）を分析対象とした。③キーワードをKJ法に基づき、被爆者・非体験者別に類似した意味内容のものをひとまとめにし、分類した。④分類した内容にふさわしい小タイトルを付け、さらに小タイトルを分類して大タイトルを付けた。

3. 結 果

3.1 大タイトル

得られた大タイトルの内容と比率を、被爆者と非体験者ごとに示したのが図1、図2である。

被爆者は「生活信条」「人間関係」「家族」「道徳観」「生きる価値」「健康」「被爆体験の受け止め方」「仕事」「その他」の順に多かった。非体験者は「生活信条」「人間関係」「道徳観」「家族」「健康」「仕事」「その他」の順に多かった。

両群を比較すると、1番目が「生活信条」で2番目が「人間関係」で約半数を占めること、3、4番目が「家族」「道徳観」のいずれかであること、さらに「健康」（被爆者は6番目、非体験者は5番目）、「仕事」（被爆者は8番目、非

体験者は6番目）がそのあとに続くなど、共通点が多くみられることがわかった。

一方、非体験者にはみられず、被爆者だけにみられた大タイトルは、「生きる価値」と「被爆体験の受け止め方」の2タイトルであった。

3.2 大・小タイトル

つぎに、大タイトルを構成する小タイトルの内容および回答数と比率を、被爆者と非体験者ごとに大タイトルとともに示したのが表1、表2である。

被爆者だけにみられた小タイトルは、大タイトル「生活信条」の中の「前向き」「自分のペースで」「くよくよしない」「なるようにしかならない」「負けたくない」「今を大切に」、大タイトル「人間関係」の中の「和」、大タイトル「家族」の中の「子どもの成長」「家族への役割・責任」「親等の言葉」、大タイトル「生きる価値」の中の「感謝」「奉仕」「平和」、大タイトル「被爆体験の受け止め方」の中の「運命」「考え込まない」「原爆のことを考えない」「生かされている」という気持ちの合計17タイトルであった。

それに対し、非体験者だけにみられた小タイトルは、「生活信条」の中の「平凡」の1タイトルのみであった。

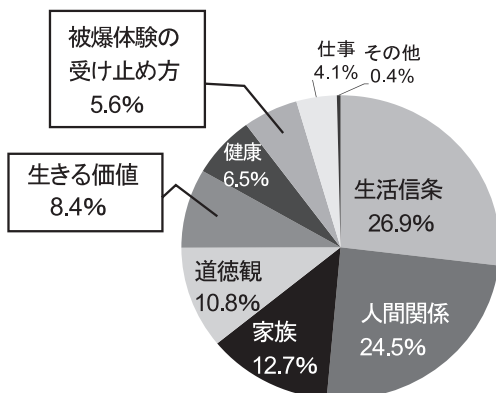


図1 被爆者にみられた大タイトル

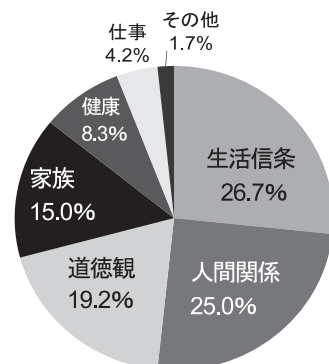


図2 非体験者にみられた大タイトル

表 2 大・小タイトル (非体験者)

大タイトル	回答数	比率 (%)	小タイトル	回答数	比率 (%)
生活信条	32	26.7	一生懸命	10	8.3
			忍耐	6	5.0
			自立	7	5.8
人間関係	30	25.0	楽しみ・趣味	5	4.2
			平凡	4	3.3
			人とのつながり	8	6.7
			人への思いやり	12	10.0
			人に迷惑をかけない	7	5.8
			助け合い	3	2.5
			家族	18	15.0
			道徳性	11	9.2
			信仰	5	4.2
			誠心誠意	2	1.7
道徳観	23	19.2	嘘をつかない	3	2.5
			継承	2	1.7
健康	10	8.3	健康	10	8.3
			計	120	100
仕事	5	4.2	仕事	5	4.2
その他	2	1.7	その他	2	1.7
計	120	100	計	120	100

表 1 大・小タイトル (被爆者)

大タイトル	回答数	比率 (%)	小タイトル	回答数	比率 (%)
生活信条	144	26.9	一生懸命	36	6.7
			前向き	31	5.8
			忍耐	19	3.6
			自立	15	2.8
			自分のペースで	10	1.9
			くよくよしない	9	1.7
			楽しみ・趣味	8	1.5
			なるようにしかならない	7	1.3
			負けたくない	5	0.9
			今を大切に	4	0.7
人間関係	131	24.5	人とのつながり	59	11.0
			人への思いやり	33	6.2
			人に迷惑をかけない	23	4.3
			和	15	2.8
			助け合い	1	0.2
			家族	42	7.9
			子どもの成長	11	2.1
			家族への役割・責任	8	1.5
			親等の言葉	7	1.3
			道徳性	25	4.7
道徳観	58	10.8	信仰	20	3.7
			誠心誠意	8	1.5
生きる価値	45	8.4	嘘をつかない	3	0.6
			継承	2	0.4
健康	35	6.5	感謝	25	4.7
			奉仕	15	2.8
被爆体験の受け止め方	30	5.6	平和	5	0.9
			健康	35	6.5
仕事	22	4.1	運命	8	1.5
			考え込まない	8	1.5
その他	2	0.4	原爆のことを考えない	8	1.5
			生かされているという気持ち	6	1.1
計	535	100	計	535	100

※ゴシック体は非体験者のみにみられたもの

※ゴシック体は被爆者のみにみられたもの

3.3 男女比較

被爆者の大タイトルについて、性差を検討するため、男女別に回答数と比率を集計し、 χ^2 検定を行った(表3)。

その結果、「家族」は、女性の方が男性よりも

有意に多く ($\chi^2(1, N=535) = 7.73, p < .05$), 「健康」は、男性の方が女性よりも有意に多くみられることがわかった ($\chi^2(1, N=535) = 8.84, p < .01$)。

また、表には示していないが、「家族」の中の

表3 大タイトルの男女比較(被爆者)

大タイトル	男		女		χ^2	p
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)		
生活信条	70	24.7	74	29.4	1.453	
人間関係	72	25.4	59	23.4	.297	
家族	28	9.9	40	15.9	7.727	*
道德観	31	11.0	27	10.7	.008	
生きる価値	23	8.1	22	8.7	.063	
健康	27	9.5	8	3.2	8.836	**
被爆体験の受け止め方	19	6.7	11	4.4	1.389	
仕事	12	4.2	10	4.0	.025	
その他	1	0.4	1	0.4	.007	
計	283	100	252	100		

* $p < .05$ ** $p < .01$

表4 大タイトルの年齢比較(被爆者)

大タイトル	小(71~75)		中(76~78)		高(79以上)		χ^2	p
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)		
生活信条	48	24.4	52	30.4	44	26.3	1.627	
人間関係	63	32.0	33	19.3	35	21.0	9.635	**
家族	30	15.2	15	8.8	23	13.8	8.070	
道德観	13	6.6	24	14.0	21	12.6	5.954	
生きる価値	10	5.1	16	9.4	19	11.4	4.603	
健康	13	6.6	12	7.0	10	6.0	.127	
被爆体験の受け止め方	9	4.6	13	7.6	8	4.8	1.833	
仕事	10	5.1	5	2.9	7	4.2	1.102	
その他	1	0.5	1	0.6	0	0.0	.917	
計	197	100	171	100	167	100		

** $p < .01$

※小：当時、小学生年代、中：当時、中学生年代、高：当時、高校生年代以上であり、()内は調査当時の年齢である。

小タイトル「子どもの成長」は、ほとんどが女性 (10人中9人) であることもわかった。

3.4 年齢別比較

さらに、被爆者の大タイトルについて、年齢による違いがみられるかを検討するため、当時の小学生年代 (71才~75才)、中学生年代 (76才~78才)、高校生年代 (79才以上) の3群に分けて回答数と比率を集計し、 χ^2 検定を行った (表4)。

その結果、「人間関係」は、当時小学生年代がもっとも多いことがわかった ($\chi^2 (2, N=535) = 9.64, p < .01$)。

4. 考 察

本研究は、ヒロシマ原爆被害者の人生において、何が支えであったかを明らかにすることが目的であった。被爆者の語ったキーワードから、非体験者との比較を行ったところ、明らかになったのは以下のことであった。またそれぞれについて考察を加えた。

4.1 大タイトル・小タイトルの数量的特徴

結果3.1, 3.2より、大タイトルのうち、被爆者だけにみられたのは、「生きる価値」と「被爆体験の受け止め方」の2タイトルであった。小タイトルのうち、被爆者だけにみられたのは、「前向き」「自分のペースで」「くよくよしない」「なるようにしかならない」「負けたくない」「今を大切に」「和」「子どもの成長」「家族への役割・責任」「親等の言葉」「感謝」「奉仕」「平和」「運命」「考え込まない」「原爆のことを考えない」「生かされているという気持ち」の17タイトルであった。一方、非体験者だけにみられたのは「平凡」の1タイトルのみであった。

以上から、被爆者の方がより多様で豊富なタイトルがみられたといえよう。このことは、被爆者がその人生において、さまざまな過酷な局

面を生き延び、乗り越えるために、多様な支えを必要とし、かつそれらを実行してきたことを表していると考えられる。

一方、非体験者だけにみられたタイトルが「平凡」というのも興味深い。これは裏を返せば、被爆者はより困難に満ちた「非凡な」人生を歩んできたことを示唆していると考えられるからである。

4.2 大・小タイトルの内容からみた被爆者の人生の支え

つぎに、本研究で見出された大・小タイトルのカテゴリー内容から、被爆者の人生を支えたものは、以下の3点に要約できるのではないかと考えられる。

①原爆被害者は、「被爆体験の受け止め方」として、「運命」「生かされている」と捉え、原爆のことを「考え込まない」ようにして、目の前の現実生活を生き抜いてきた。

なぜ自分はあるような理不尽で残酷な目に遭い、生き残ったのか。答えのない問いに対する折り合いや諦念のようなものと推測される。また、向き合うにはあまりに過酷な体験であり、そのことに触れないようにすることで、精神的に生き延びることができたのではないかと考えられる。

②その中で「感謝」「奉仕」「平和」などの「生きる価値」が形成された。

自分が生き残り、助けられ、恩を受けた体験などから、人のために生きたいという価値観に至ったと考えられる。また、誰にも同じ目に遭わせてはならないという強い意志が、恒久平和の祈願になったのであろう。

③「家族」は非体験者も支えとしていたが、被爆者は「家族」の中でもとくに「家族内の自分の役割や責任」を意識し、「親等の言葉」を支えにし、「子どもの成長」を強く願ってきた。これは、被爆者は家族成員の多くを失ったた

めではないかと考えられる。家族を失うほどにそのありがたさや大切さが増し、生き残った各々が自分の役割を自覚し、家族を作り維持することが生きる拠りどころになったのではないかと考えられる。

4.3 男女差と年代による差について

結果3.3より、男性は「健康」を大切にしてきたことから、男性にとっては仕事で収入を得るために健康を気遣うことが大切であったと考えられる。また、女性は「家族」を大切にしてきたことから、女性には家族を養うこと、とくに子どもの成長が生きる支えや励みになったと考えられる。これは結果3.3において、小タイトル「子供の成長」は、ほとんどが女性であることから裏づけられよう。

結果3.4より、当時の小学生年代の人は、中・高校生年代の人よりも「人間関係」が支えとなったことから、児童期の人たちは生き延びるために周囲の年長者に支えてもらう必要があり、それを強く意識してきたのではないかと推測される。

4.4 今後の課題

本研究の結果を踏まえ、さらに被爆者の心の実相や人生に迫るために、次の段階として、キーワードとともに語られた「自由発言」も素材に加えてより深く検証していきたいと考えている。またさらに、被爆者の人生を支えたものが、いつ、どのような過程を経て形成されたのかを明らかにするために、再び被爆者を対象とした半構造化面接を実施し、そのプロセスを詳細に検討する予定である。

付記：本研究は、広島市健康福祉局原爆被害対策部調査課のご協力のもとに研究の機会を得ることができた。また、調査対象者への聞き取りに当たっては、広島県臨床心理士会会員87名のご協力を得た。記して感謝いたします。

なお、本研究は2010年度に日本心理臨床学会から研究助成を受けたものである。また、本論文は2011年の同学会第30回大会にて発表した内容が元になっている。

参 考 文 献

中嶋みどり・一丸藤太郎・大澤多美子・倉永恭子・財満義輝・森田裕司 2011 ヒロシマ原爆被害者の六十余年の人生を支えた諸要因 (1)―被爆者と非体験者の KJ 法による比較― 日本心理臨床学会第30回大会論文集 651.